

開催地名：鹿児島県鹿児島市	
開催日時	令和元年 10 月 31 日（木） 14：20 ～ 15：50
開催場所	かごしま県民交流センター
語り部	茨島 隆 （青森県八戸市）
参加者	鹿児島市民・市職員 約 250 名
開催経緯	<p>当市では、鹿児島市地域防災計画において、それぞれの災害種別に応じて様々な対応を組み合わせて災害に備えている。中でも津波被害に対する対策は、直下型地震により発生するものと、桜島の大噴火後の大地震により発生するものが想定されており、いずれも甚大な被害が予想されている。特に、桜島の大噴火については、2020 年代に大噴火級の事象が発生する可能性が高まってきており、地震・津波に係る対応等は本市における喫緊の課題となっている。現在、これらに対する避難計画などの更なる対策を進めるとともに、避難行動等の重要性を継続的に啓発しているところであるが、日頃から災害対応に携わっている防災担当部局以外の市職員や市民の方々への理解促進が進まないため、災害体験者による災害伝承が必要である。</p>
内容	<p>（１）震災時の八戸市の状況</p> <p>八戸市の最大震度は５強、（市役所などがある市内中心部は震度５弱で、建物の柱がグラグラと揺れてどうなるのかと思う程だった）そして、気象庁発表の津波高は 6.2 メートルであり、これについては国で設置している検潮所が流されて壊れてしまい、その後の痕跡調査による結果である。被害については地震そのものよりも、津波によるものの方が大きかった。さらに八戸工業大学の調査では、白浜海水浴場の最大津波高は 10 メートルにも達していたという事が判明した。</p> <p>（２）避難所の運営状況</p> <p>避難所の開設は、市内全部で 69 カ所、避難者は 9,257 名、開設期間 51 日間で約 2,000 名の職員の派遣をしていた。職員は、12 時間交代で日勤と夜勤で従事していた。従事者が不足している状況の中、女性職員にも夜勤を強いる結果となってしまった。また、避難者に対して配布する毛布が不足し、群馬県伊勢崎市等から支援して頂いたが、配付が完了したのは 12 日深夜であった。一方で、他県からの避難者は、津波で被災した太平洋沿岸部の岩手、宮城の各県民の方が徐々に多くなり、中には原発被害も併発した福島県の沿岸部から八戸にたどり着いた被災者もいた。（他県からの避難者は延べ 472 名にのぼった）</p> <p>避難所生活が落ち着いてくると、他県から物資が続々と送られてきた。非常にありがたい一方で、避難している人たちの支援にならないものが多く含まれていた。避難所の抱える問題の一つにゴミの回収の問題があるが、送られてくる物</p>

資がそのままゴミになるケースも多く、避難所の運営サイドにとっては頭を悩ます問題であった。

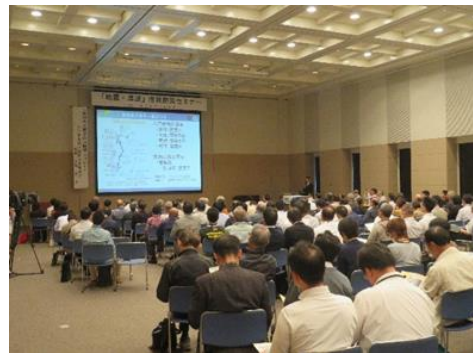
(3) 「失見当」、「正常性バイアス」について

「失見当」とは災害時のキーワードになる言葉で、「何をして良いかわからなくなる」といった、誰しもが災害時には陥ってしまう状況をさす。これは非常に怖い現象といえる。常日頃、しっかりと頭で考えて、すぐに行動に移す訓練（頭の中で自分の取るべき行動をイメージする）をしていれば、一定程度この現象は防ぐことができるかと思う。

次に「正常性バイアス」だが、危機が迫ってきたときの、「まだ大丈夫」、「いつものことではないか」等という自分を安心させようとする心理（自分にとって都合のいい解釈）をさす。そういう状況に陥ると、本当に迫っている危機に対して何もしないという状況になる。これもまた怖い現象だと思う。

(4) 自助・共助・公助

自助とは自分のことは自分で守るということ、共助とは近隣の人たちで協力してお互いが助け合うということ。公助は公的機関によるものだが、大災害の発生時にはほとんど期待できず、限定的なものになる。これは岩手県沿岸部から八戸へ避難してきた方から聞いた話だが、食事に関しては一人1日おにぎり1個しか供給がなかったそうだ。行政からはそれしかなかった。行政は最大限頑張っても結局それだけだった。その話を聞いて、行政にはやはり限界があることを痛切に感じた。従って、避難する時は自主的に、その後の対応は地域ぐるみで、やれることはやっていたきたい。隣近所の住民との日常の挨拶から始まって、自主防災活動への参加、地域での防災訓練、高齢者や障害者への支援等々、平時の生活の中で防災・減災に対する意識を持つことが大切になると思う。



開催地より

東日本大震災を経験された語り部から、津波の怖さや避難所生活についての具体的なお話を聞くことができ、改めて災害に対するイメージを強く認識することができたと思う。